

2. 柳田国男の生涯

菊地暁 folklore.lecture@gmail.com

* 柳田国男（やなぎた くにお 1875～1962）

「民俗学者。兵庫県の人。東大卒。貴族院書記官長を経て朝日新聞に入社。民間にあつて民俗学研究に専念。民間伝承の会・民俗学研究所を設立。文化勲章受章。「遠野物語」「蝸牛考」など著作が多い」（『広辞苑』）

* 幼少期（1875～1890）

- ・ 兵庫県神東郡田原村辻川（現神崎郡福崎町）・松岡家の六男（事実上三男）、「日本一小さい家」
- ・ 父・操、母・たけ、長兄・鼎、次兄・井上通泰、弟・静雄、末弟・映丘
- ・ 北条町へ（1884）、三木家へ（1885）、「乱読」の開始
- ・ 茨城県布川へ（1887）「子返しの絵馬」、祠の珠を手にする

* 文学の時代（1890～1910）

- ・ 開成中学編入学（1891）→一高（1893）→帝大法科（1900）、松崎蔵之助より農政学を専攻
- ・ 歌人・松浦菘坪に入門（1891）、森鷗外（1862～1922）とも親交
- ・ 自然主義文学者との交流：田山花袋（1871～1930）、島崎藤村（1872～1943）、国木田独步（1871～1908）
- ・ 『蒲団』（1907）と『遠野物語』（1910）「願わくはこれを語りて平地人を戦慄せしめよ」

* 官僚の時代（1900～1919）

- ・ 農商務省農務局（1900）、法制局参事官（1902）、内閣書記官記録課長（1910）
- ・ 大審院判事・柳田直平の娘・孝と結婚（1904）
- ・ 旅の開始「どこかへ行ってこないか、旅費はあるぜ」「山林問題があるごとに私を出張させてくれた」
- ・ 貴族院書記官長（1914～19 辞任）「長い大陸旅行をしたことが非常に私の人望を害してしまった」

* 記者の時代（1920～1930）

- ・ 朝日新聞社入社（論説委員）（1920）
- ・ 九州・沖縄旅行（1920～21）
- ・ 国際連盟委任統治委員（1921～23）：関東大震災後に帰国「本筋の学問のために起つという決心」

* 民俗学の時代（1930～1962）

- ・ 木曜会（1933）→『民間伝承論』（1934）、『郷土生活の研究法』（1935）
- ・ 山村調査（1934）、全国 50 箇所の山村を 100 項目の統一項目により調査
- ・ 「分類語彙」編纂（1932～）：既刊資料の整理・共有化
- ・ 日本民俗学講習会（1935）（民間伝承の会→日本民俗学会）

[文献] 柳田国男 1959 『故郷七十年』のじぎく文庫（1974 朝日選書）

この話はすべて遠野の人々木鏡石君より聞きたり。昨明治四十二年の二月頃より始めて夜分折々訪ね来たりこの話をせられしを筆記せしなり。鏡石君は話上手にはあらざれども誠実なる人なり。自分もまた一字一句をも加減せず感じたるままを書きたり。思うに遠野郷にはこの類の物語なお数百件あるならん。我々はより多くを聞かんことを切望す。国内の山村にして遠野よりさらに物深き所にはまた無数の山神山人の伝説あるべし。願わくはこれを語りて平地人を戦慄せしめよ。この書のごときは陳勝呉広のみ。

昨年八月の末自分は遠野郷に遊びたり。花巻より十余里の路上には町場三ヶ所あり。その他はただ青き山と原野なり。人煙の稀少なること北海道石狩の平野よりも甚だし。あるいは新道なるがゆえに民居の来たり就ける者少なきか。遠野の城下はすなわち煙花の街なり。馬を駅亭の主人に借りてひとり郊外の村々を巡りたり。その馬は踏き海草をもつて作りたる厚総を掛けたり。蛇多きためなり。猿ヶ石の溪谷は土肥えてよく拓けたり。路傍に石塔の多きこと諸国その比を知らず。高処より展望すれば早稲まさに熟し晚稲は花盛りにて水はことごとく落ちて川にあり。稲の色合は種類によりてさまざまなり。三つ四つ五つの田を続けて稲の色と同じきはすなわち一家に属する田にしていわゆる名処の同じきなるべし。小字よりさらに小さき区域の地名は持主にあらざればこれを知らず。古き売買譲手の証文には常に見ゆ

この書を外国にある人々に呈す

るところなり。附馬牛の谷へ越ゆれば早池峯の山は淡く霞み山の形は菅笠のごとくまた片仮名のへの字に似たり。この谷は稲熟することさらに遅く満目一色に青し。細き田中の道を行けば名を知らぬ鳥ありて雛を連れて横ぎりたり。雛の色は黒に白き羽まじりたり。始めは小さき鶏かと思いが溝の草に隠れて見えざればすなわち野鳥なることを知れり。天神の山には祭ありて獅子踊あり。ここにのみは軽く塵たち紅き物いささかひらめきて一村の緑に映じたり。獅子踊というは鹿の舞なり。鹿の角を附けたる面を被り童子五六人剣を抜きてこれとともに舞うなり。笛の調子高く歌は低くして側にあれども聞きがたし。日は傾きて風吹き酔いて人呼ぶ者の声も淋しく女は笑い児は走れどもなお旅愁をいかんともするあたわざりき。盃蘭盆に新しき仏ある家は紅白の旗を高く掲げて魂を招く風あり。峠の馬上において東西を指点するにこの旗十数ヶ所あり。村人の永住の地を去らんとする者とかりそめに入り込みたる旅人とまたかの悠々たる霊山とを黄昏はおもむるに來たりて包容し尽したり。遠野郷には八ヶ所の観音堂あり。一木をもつて作りしなり。この日報の徒多く岡の上に燈火見え伏鉦の音聞えたり。道ちがえの叢の中には雨風祭の藁人形あり。あたかもくたびれたる人のごとく仰臥してありたり。以上は自分が遠野郷にて得たる印象なり。

思うにこの類の書物は少なくも現代の流行にあらず。いかに印刷が容易なればとてこんな本を出版し自己の狹隘なる趣味をもつて他人に強いんとするは無作法の仕業なりという人あらん。されどあえて答う。かかる話を聞きかかる処を見て来て後これを人に語りたがらざる者果してありや。そのような沈黙にしてかつ慎み深き人は少なくも自分の友人の中にはある

事なし。いわんやわが九百年前の先輩「今昔物語」のごときはその当時においてすでに今は昔の話なりしに反しこれはこれ目前の出来事なり。たとい敬虔の意と誠実の態度とにおいてあえて彼を凌ぐことを得と言うあたわざらんも人の耳を経ること多からず人の口と筆とを情いたることはなほだわすかなりし点においてはかの淡白無邪気なる大納言殿かえつて來たり聴くに値せり。近代の御伽百物語の徒にいたりてはその志やすでに陋かつ決してその談の妄誕にあらざることを誓い得ず。ひそかにもつてこれと隣を比するを恥とせり。要するにこの書は現在の事実なり。単にこれのみをもつてするも立派なる存在理由ありと信ず。ただ鏡石君は年わずかに二十四五自分もこれに十歳長ずるのみ。今の事業多き時代に生れながら問題の大小をも弁えず、その力を用いるところ当を失えりと言う人あらばいかん。明神の山の木兎のごとくあまりにその耳を尖らしあまりにその眼を丸くし過ぎたりと責むる人あらばいかん。はて是非もなし。この責任のみは自分が負わねばならぬなり。

おきなさび飛ばず鳴かざるをちかたの森のふくろふ笑ふらんかも